

臨地実習に向けたシミュレーション教育の試み

—看護師への報告—

鈴木 彩加¹⁾ 佐居 由美¹⁾ 加藤木真史¹⁾ 樋勝 彩子¹⁾
 田中 加苗¹⁾ 縄 秀志¹⁾ 小布施未桂¹⁾ 中溝 倫子²⁾

A Trial in Simulation-based Education for Clinical Practicum —Reporting to a Nurse—

Ayaka SUZUKI¹⁾ Yumi SAKYO¹⁾ Masashi KATO¹⁾ Ayako HIKATSU¹⁾
 Kanae TANAKA¹⁾ Hideshi NAWA¹⁾ Mika OBUSE¹⁾ Rinko NAKAMIZO²⁾

〔Abstract〕

At St. Luke's International University, students take part in education incorporating multiple simulation training situations in a course named “basic nursing skill practicum” in the latter half of the second year.

In the practical training, students are required to adequately report information about the nursing care, which the students have provided to patients, in a limited time. The results of a questionnaire survey conducted prior to the practical training showed that 70% of the students felt it difficult to report to a nurse about the nursing care they have provided. From this background, in the 2018 academic year, we started simulation training assuming “reporting to a nurse”.

In the questionnaire survey conducted posterior to the practical training, 90% of the students reported that the simulation training was useful for the practical training. As a result of analyzing the reasons, the following three categories were identified: 【Active learning enabled us to understand important matters in the contents and methods of reporting to the nurses】, 【Active learning reduced our anxiety because we were able to imagine what the actual reporting situation would be like through the simulation training】 and 【We were able to report without nervousness based on learning of the simulation training in the experienced report scenarios】.

The findings suggest that this active learning is useful to improve practical nursing skills because it leads to the students gaining an understanding of the elements in the “reporting to a nurse” task and a reduction in anxieties prior to practical training.

〔Key words〕 reporting to a nurse, simulation training, active learning, clinical practicum

〔要 旨〕

聖路加国際大学では、2年次後期の「基礎看護技術実習」において、初めての受け持ち実習である「看護展開論実習」に向けて複数のシミュレーション教育を行っている。病棟実習において、学生は患者に行った看護ケアについて、限られた時間の中で適切な情報伝達を行うことが求められる。病棟実習前のア

1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science

2) 聖路加国際大学大学院看護学研究科（修士課程）・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Master's Program

ンケート調査では、7割の学生が看護師への報告に苦手意識を感じていることがわかった。そこで本科目では、2018年度より「看護師への報告」場面を想定したシミュレーション（以下、演習）を開始した。

病棟実習後に行ったアンケート調査では、9割の学生が、演習が実習の役に立ったと回答した。その理由を分析した結果、【看護師への報告内容や方法について大切な点が具体的に理解できた】【実際の報告場面をイメージできる演習で実践の見当がついたので不安が軽減した】【実際の報告場面で演習の学びを意識して落ち着いて報告できた】の3つの大カテゴリーが生成された。

本演習は、「看護師への報告」の要素の理解につながり、実習前の不安を軽減し、実践能力向上につながる演習として有用であることが示唆された。

〔キーワード〕 看護師への報告、シミュレーション、アクティブラーニング、臨地実習

I. はじめに

聖路加国際大学では、2年次後期の「基礎看護技術実習（1単位：45時間）」において、複数のシミュレーション教育を行っている¹⁾。

臨地実習は、学内での学習環境とは異なり、患者やその家族、看護師、医師、理学療法士などの医療従事者と関わりながら実習を行う。学生は、時間的猶予が少ないなかで報告・連絡・相談を含め適切な情報伝達を行うことが求められている²⁾。

本学では、看護展開論実習（2年次後期：2単位）において初めて患者を受け持ち、患者に行った看護ケア（患者の反応や状態、患者に関して得た療養上の情報を含む）の報告を適宜実施し、看護師との連携を図りながら実習を行う。しかし、学生の多くは、医療現場における特有の報告・連絡・相談のイメージがつかず、看護師に報告することに不安を抱いている。実習での報告場面がイメージでき、報告に必要な要素が理解できることを目的に、2018年度より「看護師への報告」シミュレーション（以下、演習）を導入した。本稿では、演習の概要と学生へのアンケート調査結果について報告する。

II. 科目の概要

「看護師への報告」演習は、2年次後期の必修科目「基礎看護技術実習」の実習前準備演習の一つとして開講した。科目の学習目標は「病棟実習を通して看護実践の場や看護師の活動に触れ、患者受け持ち実習（看護展開論実習）で、自分がどのように People-Centered Care を展開していくかを具体化することができる」としている。講義、演習、実習、実習後のグループワークや発表などで構成され、段階的な学習により学生の理解が深まる方法を取り入れている。本科目の特徴は、病棟実習で看護師とともに患者に看護技術を提供し、個々の患者に応じた看護技術の活用についての理解を深めることを主軸にしている点である。基礎看護技術実習は、看護展開論実

習に向けて準備状態を高めるステップアップの科目として位置づけられている。

III. 「看護師への報告」演習の内容

1. 演習目標と到達目標

演習目標は2つ設定し、①受け持ちとなった患者の情報収集を行い、得られた情報を整理しアセスメントできる、②アセスメントした結果も含め、優先順位を考えて簡潔に看護師へ報告することができる、とした。

到達目標は①受け持ちとなった患者の「今の状態」をアセスメントするために必要な情報と収集方法がわかる、②得られた情報をS情報とO情報に分けて整理ができる、③得られた情報を解釈し、アセスメントできる、④得られた情報とアセスメントした結果も含め、報告する際の優先順位を考慮することができる、⑤得られた情報とアセスメント結果を簡潔に看護師に報告できる、とした。

2. 演習対象者

2年次後期「基礎看護技術実習」履修者全員を対象とした。演習前のアンケート調査では、履修者98名のうち、68名（69%）が「看護師への報告に対して苦手意識がある」と回答していた。具体的には、報告内容を言語化すること、簡潔に伝えること、話しかけるタイミングなどに難しさを感じていた。

3. 患者の状況設定（図1）

本演習で設定した患者の病態と場面は、既習科目「看護展開論」で使用した事例と同じ疾患を用い、実習で学生がよく体験する場面を選定した。演習目標を達成でき、学生の理解が促せるよう、複雑な状況は排除し、学生のレディネスに合わせた患者状況を設定した。

4. 事前学習の提示

演習までに以下3点の事前学習に取り組むよう示した。

1) 事例（図1）を読み、Zさんの状態を確認するため

Zさんは88歳の女性で、5日前に発熱、咳嗽、喀痰を主訴に病院を受診したところ、誤嚥性肺炎と診断を受け、入院となった。入院後は、絶飲食、点滴（抗生剤治療を含む）をしている。排泄時は看護師付き添いのもと病室内のトイレまで歩いて行くが、それ以外はベッドに横になっていることが多い。2日前より発熱なく過ごし、昨日昼から五分粥食が開始となった。Zさんは本日で入院5日目となり、看護学生あなたは受け持ち2日目である。朝6:00の時点のバイタルサインは安定していた。病棟の朝の申し送り終了後、あなたは担当看護師の鈴木さんに一日の行動計画を伝え、鈴木さんと時間調整をしたところ9:20からシャワーバスをすることになった。鈴木さんと相談し、シャワーバス前にZさんの状態を確認して報告することになっている。

現在8:50 シャワーバスに入る前に、Zさんの状態を確認するため訪室するところである。

図1 事例Zさんの紹介

に必要な情報と方法を整理する。2) 事例患者の病態生理と看護師への状況報告³⁾に関連する事前配布資料に目を通し、重要なポイントにマーカーを引く。3) 既習科目の復習（病室でのコミュニケーションの方法、ヘルスアセスメント技術、日常生活援助技術など）をし、演習で実践できるようにする。

5. 演習90分のタイムスケジュール（図2）

まず、はじめに各グループで演習目標、流れ、ルールや患者背景の確認を行う。作戦タイムではZさんの状態をどのように確認するか事前学習をもとに方法などを検討する（図3）。実践①ヘルスアセスメントでは、Zさん（臨床経験のある看護教員が患者役を演じる）がシャワーに入れる状態かどうかを訪室から7分以内に確認する（図4）。その後、振り返り①で、Zさんのアセスメントと看護師への報告内容を検討する。学生は、実践②看護師への報告でZさんの状態とアセスメント結果を報告し（教員が看護師役を演じる：図5）、再度振り返り②をして報告内容を洗練させる。実践③看護師への報告後、デモン

ストレーション動画（同場面における看護学生の報告例：図6）を視聴し、振り返り③で自分たちの報告内容と比較し気づいたことや報告のポイントを考え話し合う時間を設けた。最後に、演習の自己評価表を記入し、終了とした。

複数のグループが同時進行で演習を行うため、各グループのファシリテーター役教員には、演習のアウトラインシートとデブリーフィングガイドシート⁴⁾を配布し、事前に打ち合わせを行い共通理解を図った。



図3 作戦タイムの様子



図4 実践①ヘルスアセスメント

10分	はじめに	目標、本日のスケジュール、演習の設定やルール、患者背景について確認する。
10分	作戦タイム	Zさんに実際に行うヘルスアセスメントの方法と順番を考える。
7分	実践①ヘルスアセスメント	グループで考えたZさんのヘルスアセスメントを7分以内に実施する。
25分	振り返り①	1. 得られた情報を整理する 2. 情報を解釈しアセスメントする 3. 看護師への報告内容を検討し、シナリオを作成する
2分	実践②看護師への報告	得られた情報とアセスメント結果を、優先順位を考えて簡潔に看護師に報告する。
13分	振り返り②	より簡潔明瞭な報告内容をグループで考え、シナリオを修正する。
1.5分	実践③看護師への報告	得られた情報とアセスメント結果を、優先順位を考えて簡潔に看護師に報告する。
4分	動画視聴	看護学生のデモンストレーション動画を視聴する。
8分	振り返り③	実施した報告内容と動画の報告内容と比較し、気づいたことを話し合う。
2分	評価表記入	自己評価表を記入し、担当教員に提出して終了する。

図2 演習（90分）のタイムスケジュール



図5 実践②③看護師への報告



図6 デモンストレーション動画視聴

IV. 演習における学生の学びと看護展開論実習での「看護師への報告」実施結果

看護展開論実習終了後、履修者を対象に本科目の改善を目的とした Web アンケート調査を実施した（実施期間は2019年3月4日～10日）。調査内容は、1）「看護師への報告」シミュレーションは看護展開論実習で役に立ったか、2）役に立った、または、役に立たなかったと感じた理由、3）病棟で看護師に報告する際、どのようなことを意識して報告したか、4）2月の看護展開論実習において「看護師への報告」はどのくらいうまくいったか、の4項目とした。1）は「はい」「いいえ」の二択、2）3）は自由記述、4）は10件法（1：全くうまくいかなかった～10：非常にうまくいった）で回答を得た。

〔分析方法〕調査内容のうち、1）と4）については単純集計で傾向を明らかにした。2）と3）の回答は、内容の類似性・共通性に基づき〔カテゴリー〕を生成し、内容を総括するカテゴリー名を付与した。さらに、2）ではカテゴリー間の類似性に基づき【大カテゴリー】を生成した。質的分析結果の真実性は、複数の研究者で同意が得られるまでカテゴリー内容を議論し確保した。

〔倫理的配慮〕調査は科目の内容改善を目的とし、調査への参加は任意であること、演習関連資料を含め匿名化された上で公表される旨をアンケートの冒頭に明記した。

1. 看護展開論実習での「看護師への報告」実施アンケート調査結果一

学生98名に対し Web 上でアンケートを依頼し、43名から回答を得た（回収率43.9%）。

1) 「看護師への報告」シミュレーション演習は、実習で役に立ったか否か

43名の学生のうち、役に立ったと回答したのは41名（95.3%）、役に立たなかったと回答したのは2名（4.7%）であった。

2) 演習が役に立った、または、役に立たなかったと感じた理由（表1）

演習が役に立った理由を分析した結果、3つの大カテゴリーが生成された。〔報告する看護師への声かけの方法がわかった〕、〔何に焦点化して報告すべきなのかわかった〕、〔報告する内容の順序の重要性がわかった〕、〔報告の適切な長さや簡潔だが丁寧に報告する方法がわかった〕、〔具体的な報告方法がわかった〕、〔得た情報を整理する方法がわかった〕、〔結論を明確に報告する必要性がわかった〕の7つのカテゴリーから構成される【看護師への報告内容や方法について大切な点が具体的に理解できた】、〔現実味があり実際の報告場面をイメージできた〕、〔どうすればよいかわからなかった報告場面の目安を得た〕、〔実習への不安が軽減した〕の3つのカテゴリーから構成される【実際の報告場面をイメージできる演習で実践の見当がついたので不安が軽減した】、〔実習であまり緊張せず報告できた〕、〔実習で焦ることなく落ち着いて報告できた〕、〔実習時に簡潔に報告できた〕、〔実習時に優先順位をつけて報告できた〕、〔演習で学んだことを意識して実習時に報告できた〕、〔実習時に少し自信をもって報告できた〕の6つのカテゴリーで構成される【実際の報告場面で演習の学びを意識して落ち着いて報告することができた】という3つの大カテゴリーが生成された。

演習が役に立たなかった理由としては、演習通りにはいかなかったと推測できる記述がみられ「実際、看護師を前に報告しようとする、看護師の多忙さから演習で行ったように実践できなかった。さらに、緊張も相まって報告の際に余計な時間を有してしまったことから、演習で行ったような自分の考えも述べるような報告を行うことができなかった。看護師からも追及されることがなかったため、事実だけ述べれば良いだろうと考えてしまった。」とあった。また、「あえて行う必要性はなかった気がする。」という意見もみられた。

3) 病棟で看護師に報告する際、どのようなことを意識して報告したか（表2）

回答内容を分析した結果、〔内容の重要性・緊急性を判断した上で簡潔明瞭に報告する〕、〔報告時の看護師の状況を確認する〕、〔看護師へ声をかける際に患者情報と目

表1 実習に役立った点

大カテゴリー	カテゴリー	「役に立った」と回答した人の理由（一部抜粋）
看護師への報告内容や方法について大切な点が具体的に理解できた	報告する看護師への声かけの方法がわかった	最初の声掛けの仕方や簡潔に述べる方法を知ることができた。 はじめの声のかけ方が参考になった。
	何に焦点化して報告するべきなのかわかった	報告する際に何を伝えなくてはならないか明確だった。 演習したことによって何を言えば良いか分かり緊張が和らいだ。
	報告する内容の順序の重要性がわかった	重要だということから報告することの大切さがわかった。
	報告の適切な長さや簡潔だが丁寧に報告する方法がわかった	看護師へ報告を行う際に、どのような伝え方をすれば良いか、どれだけ簡潔に話すのかなど気をつける点を見つけることができた。
		どのくらいの長さで伝えて良いかなど、演習で周りのやり方や模範報告を見ることで把握することができた。
		簡潔且つ丁寧な報告例を知れた。
	具体的な報告方法がわかった	病棟で実際に報告する際には本当に時間が無かったので、事前にポイントを絞って短時間で報告する方法を学べてよかった。
		看護師への報告は初めてだったので具体的にどのように行ったら良いのかを学べて良かった。
		事前に練習していたことにより、どのような点に気をつけてどのような風に報告すれば良いのかを学ぶことができたため、実習時にとても役立った。
実際の報告場面をイメージできる演習で実践の見当がついたので不安が軽減した	得た情報を整理する方法がわかった	得られた情報をどのように整理して看護師へ伝えれば良いのか、分かった。
	結論を明確に報告する必要性がわかった	簡潔にまとめる事、結論をわかりやすく伝える事を演習で学べた。
	現実味があり実際の報告場面をイメージできた	事前に準備する機会があったことで、本番看護師にはどのように行えば良いのかをシミュレーションすることができた。
		どのように自分で収集した情報を看護師に伝えるのかをイメージを得てから、実習に臨むことが出来た。
		現実味があってよかった。
	どうすればよいかわからなかった報告場面の目安を得た	看護師とどういうふうに話せばいいのかわからないのでその目安になる。 全くわからない状態だったので1回見本を見せてもらえたのが良かった。
実際の報告場で演習の学びを意識して落ち着いて報告することができた	実習への不安が軽減した	実際の感じが体験できて、不安が軽減した。
	実習であまり緊張せず報告できた	実習でも緊張はしたが演習によって何を言えば良いか分かり緊張が和らいだ。 報告する際に、どのような順番で何を伝えればよいかを自分の中で整理でき、あまり緊張せずに報告できたと感じた。
		授業が設けられていなかったらどのように看護師に報告をするのか分からず、病棟で焦っていたと思うため、事前にシミュレーションをすることで落ち着くことができた。
	実習時に簡潔に報告できた	練習したように真似をして看護師に手短かに報告ができた。
	実習時に優先順位をつけて報告できた	実習の時優先順位をつけて看護師に簡潔に伝えることができた。
	演習で学んだことを意識して実習時に報告できた	簡潔にまとめる事、結論をわかりやすく伝えることを演習で学んで、実習の時に意識できたと思う。
	実習時に少し自信をもって報告できた	演習がなかったら、もっと自信がなかったと思う。

的を伝える], [アセスメントの根拠と結果も報告する], [報告の順序を考える], [看護師が直接見えない場面を報告する] という6つのカテゴリーを抽出できた。

4) 2月の看護展開論実習において「看護師への報告」はどのくらいうまくいったか(1:全くうまくいかなかった~10:非常にうまくいった)(図7)

43名のうち回答として最も多かったのは7点(13名, 30.2%)で、次いで6点(9名, 20.9%)となった。実習

場面における看護師への報告の実施は初めてに近い状況のなか、比較的達成感を感じることができたとうかがえる。学生の自己評価平均値は6.3点であった。

V. まとめ

本演習の取り組みにより、学生は「看護師への報告」に必要な要素を理解し、実際の報告場面をイメージできたことから実習に対する不安の軽減につながったと推察

表2 病棟で看護師に報告する際に意識した点

カテゴリー	どのようなことを意識して報告したか（一部抜粋）
内容の重要性・緊急性を判断した上で簡潔明瞭に報告する	簡潔に、報告する必要があることを吟味する。 報告の必要性、緊急性が高いものから伝えるように意識した。
報告時の看護師の状況を確認する	まず、看護師に報告したい旨を伝え、その時点で看護師の都合はいいかを確認する。 看護師の状況を見て、報告の長さを変える。
看護師へ声をかける際に患者情報と目的を伝える	これから何を報告、相談したいのかを明確にするため最初に報告すること相談したいという旨を伝えた。 患者の病棟番号と患者のフルネームを看護師に伝える。
アセスメントの根拠と結果も報告する	事実を報告するだけでなく、自分のアセスメントを伝えることや、アセスメントを踏まえたうえでどうしたらよいかを聞くことも意識した。 自分がやった内容とそれに関して患者がどんなことを思ったかを伝えアセスメントしたことを意識した。
報告の順序を考える	今から伝えることを端的に最初に伝えてから、主観的情報と客観的状況を踏まえた上で自分なりのアセスメント結果を伝える。そのアセスメントから次に必要な情報やその情報を得る上で必要な技術などを伝える。
看護師が直接見ていない場面を報告する	看護師が見ていないリハビリや普段と違うことを伝えるようにした。 看護師が同席していなかった時のことを、時系列で要点と考えたこと、感じたことをまとめて伝えるようにした。

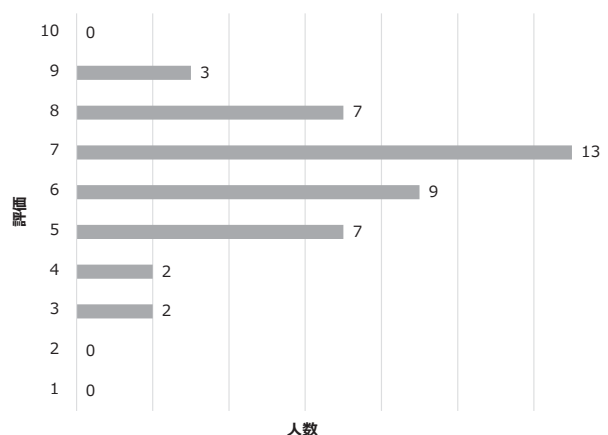


図7 学生の自己評価

できる。また、演習での学びを実習の場で活用でき、実習前の準備状態を高め実践能力の向上につながる演習内容であることが示唆された。今回の演習では、学生が確認した患者の状況を報告する内容であった。実習では学生が考えた1日の行動計画を伝え、担当看護師と調整することや、実習終了時に行う1日のまとめと翌日に向けて考えていることを報告する場面もある。実習で想定される報告場面の演習を新たに加えることも一案であろう。一方、演習が役に立たなかった理由からもわかるように、学生は練習を重ねていても実習の緊張感や現場の看護師の忙しさに圧倒され、十分に報告できないことがある。

看護師役の教員がアセスメント内容を引き出せるような働きかけをしつつ、病棟実習では遠慮や緊張から練習したような報告ができなかったという上級生の経験を学生と共有し実習前の自己学習を促すことが有用だと考えた。

謝 辞

本演習の準備・実施にあたり、ご協力くださいました臨時助教の皆様ならびに大学院生のTAの皆様にご心より御礼申し上げます。演習の構成についてご助言いただきました東京医科大学阿部幸恵先生に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 樋勝彩子, 佐居由美, 加藤木真史ほか. 臨地実習場面を想定したシミュレーション学習－初回訪室時の環境整備と観察－. 聖路加国際大学紀要. 2019;5:95-9.
- 2) 厚生労働省. 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書（平成23年2月28日版）[Internet]. <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf> [参照 2019-10-20]
- 3) 田中美穂, 蜂ヶ崎令子. 看護学生のための実習の前に読む本. 東京: 医学書院; 2015.
- 4) 阿部幸恵, 藤野ユリ子. 看護基礎教育におけるシミュレーション教育の導入: 基本的な考え方と事例. 東京: 日本看護協会出版会; 2018.